

C. G. F. シムキン

『従属経済の不安定性』

逸見謙三

本書 C. G. F. Simkin, *The Instability of a Dependent Economy, economic fluctuations in New Zealand 1940-1914, 1951, London, Oxford Univ. Press, pp. X, 208* はその問題の示す通りニュー・ジールランドの経済変動を、その発端から一九一四年までの期間について研究したものである。最初に行つた適切な問題設定は、巧みな統計の使用と相俟つて、本書を、小冊ではあるが有用なものたらしめている。著者の理解したニュー・ジールランド経済の特質は従属経済であること、急速な発展をした経済であることの二点である。第一の特質は「国民所得の比較的大きな部分を対外取引に負い、かつ世界輸出額の余りにも小さな消費者なので、その主要市場たる諸国の所得には大きな影響を及ぼしえないという」(五頁)経済の特質である。そこから分析過程で対外取引を非常に重視しているという特徴が第一に本書に附せられる。第二の特質によつて本書に附せられる本書の特徴は経済変動を cyclical なものと、secular なものととの合成として

理解していることである。本書が実証した経済変動の過程は、丁度シムキン教授がはじめの方で(一六頁)引用した、長期の生長と短期の変動との分離は、innovation の過程によつて両者とも影響されることのために不可能であるというシムムペーターのモデルと一致している。(註二)

(註一) 従属経済とはいふまでもなく、植民地経済のことである。従つて本国からの質的・制度的影響を強調した研究が多う(例えば E. H. Jacoby, *Agrarian Unrest in Southeast Asia, 1949. Chap. 1. 『経済評論』二七年十月号参照*)。しかしニュー・ジールランドは全く白人の社会なのでこの面は軽視される。対外取引における関係が重要となつてくる。(J. W. Williams, *The New Zealand Economy in War and Reconstruction, 1948* における従属経済の特徴だけが本書と同様なのは面白い)

(註二) J. A. Schumpeter, *The Analysis of Economic Change; in Readings in Business Cycle Theory, 1944* (邦訳あり)参照。

さらに本書の第三の特徴がある。それは経済変動 (general economic fluctuations) を所得の変動として把握していることである。ところがニュー・ジールランドには残念ながら企図した分析にたえうる程の所得統計がない。そこで著者は所得の変動と強く関連しながら動く指標を substitute criteria として追求している。多くの国々で経済変動、特に短期の循環的変動を分析する

に充分な所得統計がえられない今日、このような手法はかなり参考になるものである。

本書は三部よりなる。第一部では第二章、全体の一割許りの頁数を用いて分析方法の問題を論じている。第一章では

Social Income III Consumption + Home-Financed Investment
+ Net External Receipts - Dependent Imports

という式を中心に論じている。第二章では統計操作の問題を論じる。第二部は五章、約九〇頁を費して第一部で論じた方法論を実際のデータに適用している。輸出と第一次産業(第三章)、公債、移民と財政(第四章)、輸入、製造工業と建築業(第五章)、貨幣、銀行と支払い、バランス(第六章)、第二部の結論(第七章)からなる。ほとんどが經濟の部門別の統計的操作である。第三部は五章、約九〇頁からなり、第二部で明らかにした時期別の変動の歴史である。經濟の発端、一八四〇〜六〇年(第八章)、マオリ族との戦争とゴールド・ラッシュ、一八六〇〜七〇年(第九章)、投資ブームと長期不況、一八七〇〜九五年(第二〇章)、新商品の輸出と価格騰貴、一八九五〜一九一四年(第二一章)及び結論(第二二章)からなっている。

これ等各章の研究が明らかにした事は三つある。第一はサイクルの決定である。この期間に於いて六つの主要經濟的發展の期間を区別することができる。これ等の中三つは主循環であり、四つは循環運動を示す等々。そしてそれがいつからいつまでであるか等(年間の初期・中期・末期の区別まで行っている)。第二に

三つの substitute criteria、すなわち net external receipts、dependent imports、circulating money の動きが一定の納得しうるラッグをとまなつて一致しているということである。第三は變動の決定要因をあきらかにしたことである。輸出、外債、個人資本輸入、銀行信用の四つの動きが經濟變動(所得變動)を惹起するということをあきらかにした。この点を少し述べよう。

輸出は景氣循環に重要な役割を演じている。一八五〇年代におけるオーストリア向け穀物、蔬菜の輸出(これはヴィクトリヤ州における金鉱の開発によりもたらされたものである)、一八六〇年代のゴールドラッシュ、そして一九世紀末からの畜産物冷凍による新しい輸出である。一八八二年冷凍肉が輸出されて以来、肉及び乳製品の輸出増は農業に革命をもたらし、諸種の冷凍工場、製酪工場等を設立せしめた。「金や投資によるはかない、人為のブームとは異なり、この繁榮はがつしりと冷凍がもたらした新産業の發達に基礎をおいていた。」(二六九頁) また「ニュー・ジールランド經濟に対して冷凍がもたらしたのは貿易構成の変化や農業の拡張にとどまらない。一九一一年には四一の冷凍工場と四〇三の製酪工場が五、五〇〇人を雇用していた。港まで運ばれる貨物は殆んど鉄道の能力一杯に増加し、沿岸航海をも活気づけた。さらに新たな開港は種々の仲買のもうけ口となり、銀行の短期貸出の増加を必要ならしめた」(二七五頁)と。しかし輸出は循環的運動そのものには大して重要ではない。個人資本輸入や銀行信用が重要なのである。一八七〇年代の一般的繁榮は主として外債に依

ものである。オーストラリア及びニュー・ジールランド自身のワールド・ラッシュが終了し、このいかにも植民地らしい投資開発が行われたのである。これは「植民地がとくに欲しているのは道路、鉄道、移民等の公共事業である（一四六頁）」という声明に始まる。しかしやはり短期変動には重要ではない。やはり銀行信用が重要なのである。私的資本の役割はその動きの形跡をうるのに困難なので評価しがたいが、かなりの役割を演じている。最後に銀行政策はサイクルにおける最も重要な要因である。

かくしてシムキンの画いたニュー・ジールランドの経済変動は、我々にはシムキンペーターの innovation による economic development の過程と同じものとして理解しうるのである。

さて以上の分析から、短期の不安定要因は銀行政策であるということになり、それが経済を安定しようという観点から重要なものとなる、同様のことは第一〇章の財政に関してもいえるのである。しかも銀行政策も財政も、他の決定要因よりもコントロールしやすいのである。かくして経済安定政策には銀行政策と財政が重要なものとなる。著者は次の言葉をもつてこの研究をおわる。

「ニュー・ジールランドの経験は銀行及び財政の重要性を強調しているというのが我々の最後の見解である。…従つて、従属経済も強力な銀行制度及び強力な財政制度が経済安定の根本的必要条件であるというルールの例外ではない。…それは、それ等の使用に際して自然な輸入を安定することと輸出業者の所得を安定することに重点をおかねばならないという点でのみ、他の経済と異なつ

ている。」（二〇四頁）

以上のような内容から次のようなことがいえるのではないか。第一にニュー・ジールランド経済に対する認識である。わが国に広く行われているニュー・ジールランド経済の認識は、それがわが国経済と全く性質を異にするものであるということである。それどころか合衆国経済とも性質を異にするものである。生産要因の組合せにおいて最も豊富なのは土地であり、最も貧しいのは労働である。そこには極めて労働生産性の高い農業が行われている等々。従つてニュー・ジールランド経済がはらんでいる経済問題、農業問題はわが国におけるそれ等とは全く異なるものであると考えられてきている。しかし本書が特徴づけたニュー・ジールランド経済の性格は、わが国経済をも強く特徴づけている従属的性格なのである。米英等を national economy といおう、これ等の経済は強く世界経済を動かしていく、わが国やニュー・ジールランド経済はそれ等に従属する dependent economy なのである。従つて貿易と国内経済の関係がはらむ問題において両者は多くの類似点を見出すであらう。例えば輸入価格の短期的運動と消費財の輸入との間には殆んど相関がない（六〇頁）等。

しかもこのような小国ですら短期変動は銀行政策と財政によつて安定せしめうるものである、という結論は重要である。

第二は所得変動の研究に関するものである。現在わが国ははじめ多くの国々でえられる所得の推計は極めて貧しい。それは古く過

去にさかのぼつてゐる事が出来ない。尤もに短期的變動の研究に耐えられるようなものは殆んどえられない。本書が示しているように、經濟變動の研究には四半期毎の所得の動きを知る必要がある。これ等を解決するために substitute criteria を選び、それらが一定のラッグを伴いながら同様の運動を行つたことを示した点は我々に大いに参考になると思われる。

最後に本書に対する不満と疑問を提出しよう。

最初に不満。第二部の部門別の統計的研究と第三部の歴史的研究とが必ずしもよく結びついていない。例えば一二四頁以下の地域的敘述は本書全体に対して如何なる役割をもつてゐるのかはつきりしてない。もし著者がいうように、第二部は vertical であり、第三部は horizontal であるならば、又後者では前者に用いなかつた歴史的資料を用いて前者の結論をテストする(序文)ならば、私には經濟の發展にも、循環的運動にも關係づけられていない地域的敘述は不必要なように思われる。

次に疑問。その一。著者は經濟變動の形をサイクルとか短期變動とかいつてゐるが果して同じ意味に使用してゐるのかどうか。

(私は本書では同じ意味に使用されてゐると考えるが)もし同じものと解するならば次の問題が生ずる“Exports were probably the dominant factor in the major cycles of the fifties and sixties,... Exports, however, played a less important role in cyclical fluctuation proper;... External public borrowings were the principal factor in the general

prosperity of the seventies, but were less important than exports in producing short-term fluctuations. Banking policy was thus the most important factor in the cycles we have examined...”(一九二—一九三頁)等において要因とは如何なる意味に使用してゐるのであるか。

景氣循環論の伝統的問題の一つに景氣の転回点 (turning point) がいかにして生ずるかというものがある。この問題が先に掲げた變動要因においていかにとり扱われているか。“During the cycles of the seventies bank loans were not only the principal factor, but initiated cyclical movements as well as providing their main fuel.”(一九三頁)という記述から考えると主として fuel として考えられてゐるのではないかと思われる。本書は全体として転回点の問題に殆んどふれていない。転回点の問題にふれないでサイクル乃至その要因ということが果していえるのだろうか。

この事から第二の疑問が生ずる。それは輸出、外債、個人資本輸入、銀行信用が變動の決定要因であるということに關してである。輸出のような金銀の開發や新産業の發生によるものと、銀行信用のような貨幣的現象を一諸に論じうるものであろうか。銀行は何故に信用を拡張するのか。誰が何故に信用をうけるのか。更に初期における個人資本輸入(それは移民に伴うものであるか)が何故になされたのか。私はより根本的變動要因とそれから派生したもののこの區別が出来るのではないかと思う。(二八・二・四)